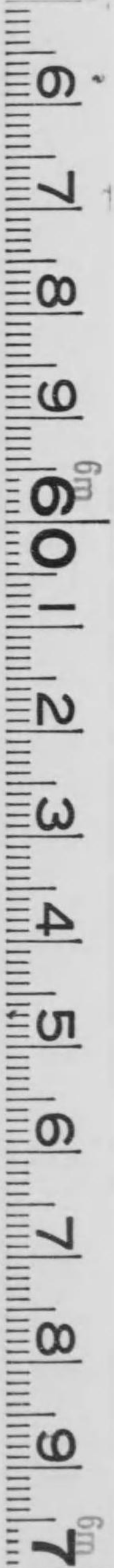


60
511

始

P5 始



始



60-511

話の痛頭

述士學醫森



大正
8.5.31
内交

凡例

一、本書は頭痛の種類、頭痛を來す原因、頭痛を來す主なる病氣と其の原因、症候、豫防法、攝生法、治療法等に就て、斯病の大家森醫學士に請ふて之を編せるものである。

一、本書掲載以外、腦膜炎もまた頭痛を主要なる症候とするものであるが、本症は元來殆んど不治の症と云ふべく、それに本叢書中腦病の話に、土田博士が詳述されて居るから、本書には之を除外せる次第である。

一、思ふに頭痛は現代病である、文明國民の均しく悩むところであつて、戦後の經營、國際の關係、實業上其他の競争益々頭痛患者を多くならしむるは多言を用ゐず、本書幸ひに之れが豫防上の指針となり、治療上の活顧問たらば編者の讀者諸君と共に同慶に堪えざるところである。

一、本書編纂の體裁竝に行文上の責任は總て編者に存するものである。

大正己未歲彌生中旬

編纂者謹識

目次

第一章 腦の解剖竝に生理 一
 腦の區分 〓 最も重要なものは腦髓 〓 六層の保護層 〓 第一層 〓 第二層 〓 第三層
 〓 爾他の三層 〓 溝と廻轉 〓 腦の重い人は賢い 〓 體重と腦量との關係 〓 文明
 人は腦量多し 〓 溝廻轉の多き程良し 〓 大腦は精神の宿る所 〓 腦は吾人の中
 央政府 〓 大腦は活きたる圖書館 〓 小腦は運動を司る 〓 延髓は生死の點 〓 大
 切なる反射作用 〓 腦神經

第二章 頭痛の種類 一三
 種類 〓 實質的變化より來る頭痛 〓 中毒性頭痛 〓 官能障害性頭痛

第三章 頭痛の鑑別と其療法 一七
 第一 中毒性頭痛 一七
 第二 感冒惹きの頭痛 二六

第三 腦に異常あるときの頭痛……………二九

第四 頭痛持ちの頭痛……………三〇
種類||神経性の頭痛||充血性の頭痛||貧血性の頭痛||應急手当||根治法

第五 偏頭痛と其療法……………三五
主徴||原因||経過||療法

第四章 男子の頭痛持ち……………三八

第一 男子の頭痛の多くは神経衰弱……………三八

第二 神経衰弱の症候……………四〇
神経の衰弱||肉體的の徴候||作業不能||精神的徴候||強迫觀念

第三 神経衰弱の原因……………四八
先天性原因||後天性原因||統計的原因別

第四 神経衰弱の攝生法……………五一
規律を守れ||飲食物||飲酒喫煙の害||運動||職業の注意||七情の變化を避

けよ||熱眼

第五 神経衰弱の治療法……………六一

第五章 女子の頭痛持ち……………六三

第一 婦人の頭痛はヒステリーが多い……………六三
婦人と頭痛||婦人に多き病氣||神経衰弱とヒステリー||女に多い||ヒステリーと子宮

第二 ヒステリーの症候……………六七
身體的症候||精神的症候||感情の變化||作業不能||感情の變換||子を産むことが少い

第三 どうして起る乎……………七五
過大の教育||婦人の獨立||年齢の關係||其他の關係||おさんどんの理想體格||どんな人に多いか

第四 どうすれば豫防される乎……………八三

教育の注意 月經時の注意 慰安法 家庭の平和

第五 治療法 …… 八六

原因療法 治療體操 散步 水治法 其他の療法

目次終

家庭醫學叢書 第五編 頭痛の話

醫學士 森 繁 吉口述

第一章 腦の解剖竝に生理

頭痛のことを話すには、一應腦及び神經の作用を説明するの必要があるから、先づ此等に就て一通りの説明を加へ、後に頭痛の原因、頭痛を來す病氣及び其の療法に就て述べようと思ふ。

腦は精神作用を司どり、我々身體の最上層なる頭蓋の中に位し、身體の各部分は、神經と云ふ電線によつて連つて居て、一度腦髓より命令を下せ

腦の區分

ば、其の命令が直ちに身體各部によりて遂行さるゝものである。脳には又
數多の區分があつて、頭蓋の腦天から顔の方に向け、腦全體の殆んど十分
の八を占めて居るのが「大脳」で、頭蓋の後ろの方から頭部の直ぐ上に位し
て居るのが「小脳」、そして此の小脳と大脳との間にはワロリー氏橋と云ふ
小さな橋が架つて居る。それから小脳から脊髄の方へ續くところには「延
髄」と云ふて、生活上最も大切な「生死の點」と稱せらるゝものがあつて
それより直ちに脊髄に續いて居る。

人が萬物の靈長と云はれて、他の動物の上に獨り超越して居る所以のも
のは、實に腦髄の爲めである。他の胃や心臟或は肺等に至つては、他の動物
中には、人間よりも反つて健全で、然も完備したものはいくらあるが、獨

り腦髄に至つては、如何なる動物と雖も、人の腦に見るやうに、其の構造
の複雑精巧なる、微妙不可思議なる作用を有つて居るものはない、即ち此
の一事にみても、人間の中最も重要なものは腦髄なることが判るのであ
る。

腦はかく重要なものであるが、其の質は頗る柔軟なるものであるから
して、之を保護する爲めに、廣薄六層の保護層より成り立つ處の頭蓋を以
て、殆んど金城鐵壁の如く取り圍んで居るのである。

保護層の第一層は毛髪であつて、これが腦髄を保護することが夥しい
毛髪が密生して且つ長く伸びて居れば、外力が働いても、頭の地を傷ける
ことが出来ぬ、また寒さ暑さを防ぐにも、毛髪は頗る重要なものである

第二層

から、頭蓋の末だ充分に堅まらぬ小兒時代は勿論、大人と雖も無暗に毛髪を短かく剃るのはよろしくない。

脳の第二の保護層は、頭の皮膚である。頭の皮膚は、他の部の皮膚と其の構造には變りは無いが、更に厚く緊密に出来て居て、無数の毛髪を生やし、多数の皮脂腺があつて、多量の脂肪を分泌し、又他よりも多くの血管があつて、其の營養を良くして居るのだから、誤つて頭に創傷を受けても其の創傷は他の部の創傷よりも早く癒着するものである。

保護層の第三は頭蓋骨であつて、八個の堅い滑らかな骨より成り立つて其の中に頭蓋腔を造つて居る。そして各頭蓋骨は丁度二重の壁のやうに、内外二枚の骨板が重なり合ひ、其の間に板障と云ふ物質が挿つて居るから、

第三層

他の部位の骨に比して頗る強い。そして「アトラス」と云ふ小環狀の骨の上に載つて居り、其の外部即ち頭の周圍には、澤山の筋肉が附いて居つて頭をして、或は上を向いて天を仰がしめ、或は下に垂れて地を望ましめ、或は前後左右意の向く儘に廻轉させるのである。

層 爾他の三

頭蓋骨の内部にはまた、硬膜、蜘蛛膜、脈絡膜の三保護層がある。硬膜は緻密な纖維層から成り、脳髓の形狀を其の儘保持するの役目をなし、脈絡膜は脳髓に血液を供給するの務をなす爲め多量の血管を含んで居る。蜘蛛膜は、蜘蛛の巢のやうな弱い纖維膜であつて、多少移動し得る餘地を頭に與へるものである。そして此の三層の間には液體があり、脈絡膜と脳との間、腦の各細胞の間にも亦液體が満ちて居つて、絶えず腦を保護し、坐

臥進退の都度頭部が動搖振盪しても、聊かも腦に害を與へぬやうの装置になつて居るのである。

腦の表面は灰白色を呈し、數多の起伏凹凸を有して居る、それを腦の「溝」及び「廻轉」と唱へ、其の人の賢愚、年齢の長幼に應じて、其の凹凸に差がある、總て才能智識の勝れて發達せる大人ほど、其の溝は深くして、其の廻轉は著しく、幼者愚者の溝は淺く、廻轉は少い即ち人の賢愚の差は、一に腦の廻轉竝に溝の如何に關係するものである。腦の廻轉が大きく溝が深ければ、其の部分の神經細胞も亦能く發達して居るものであるから、従つて此の細胞中に含まれて居る神經の力も多く、思考力、動作力を生ずることとも亦大なるべき筈である。

腦の大小輕重は、また人によつて差あるもので、腦髓の大きく重いほど其の人は伶俐である、従つて初生兒の腦量は最も輕く、男兒は三百三十瓦、女兒は三百瓦位のものである。そして成人するに従ひ、漸次重量を増加して、二十歳より三十四五歳までの間が最も重く、五十の坂を越すと、漸次下り坂になつて減少する傾きがある。成人の腦量は、平均男子は千三百七十五瓦、女子は千二百四十五瓦ある、即ち此の關係よりして、普通には女子はどうしても男子の智識に及ばざる理由が分るのである。

また同じ男子にあつても、其の腦量の重いほど智識は多いわけである。今古今の學者名士の二三に就て其の腦量を見るに

哲學者ガウスは七十八歳で

千四百九十瓦

體重と
脳量との
關係

詩人ダンテは

千四〇二十瓦

詩人シルレルは四十六歳で

千五百八十五瓦

哲學者カントは八十二歳で

千六百瓦

解剖學者クヒールは六十三歳で

千八百〇七瓦

あつたと云ふことであるから、前の男子の平均脳量に比して、此等の人の脳量が遙に大なるを知る、即ち賢者は凡人よりも、脳量が多いと云ふことを證據立てるのである。我が國一代の賢人故桂公爵の如きも頗る脳量が重かつたと云ふことである。

脳量が多いものほど智識が多いと、前に述べたが、それは人間ならば人間と云ふ同一種屬に就てのことであり、または體重に比例して重いと云ふ

ことではなければならぬ。單に體重のみを以て云へば、動物中には我々人類よりは遙かに脳量の重いものがあるけれども、其の智識は決して人間より進んでは居らぬ、即ち脳量の體重に比して重いものほど智識が進んで居りまた同一種屬間にあつては、其の脳量が比較的等しいもの程賢者であると云ふことになるのである。今試みに動物に就て脳量と體重との比例を見るに

象の脳量は

體重の五百分の一

羊は

三百五十分の一

鷹は

百六十分の一

鼠は

百四十分の一

鳩は

百三十分の一

と云ふ割合になつて居るから、此等の中では鶴は一番伶俐なわけになつて居る。

それから同じ人間であつても、文明國と野蠻國によつて腦の發達が異り、文明の民は腦重重く、尙ほ其の進歩に連れて漸次増加して行くことは、有名なるブローカ氏が、各年代の巴里市民に就て證明したところである。またシユミット氏は、古今の埃及人に就き測定したが、漸次文明の衰頽するに連れ、國民の腦量も減すると云ふ結果を測定し得たと云ふことである。また此の理と同様であるが、同一種屬同一國民にあつても、田舎漢は都人士よりも腦の目方が輕いと云ふ事實があるのである。以上述べたところによれば、腦の重量の重いものは一番にエライやうで

あるが、茲にまた古來有名な人であつて、平均腦量よりも輕い腦量の人もあると云ふ反對の現象もある、例へば

- 生理學者ハーレスは四十歳で 千二百三十八瓦
- 生理學者チーデルマンは七十九歳で 千二百五十四瓦
- 雄辯家ガンベツタは 千三百四十六瓦
- 化學者リービツヒは七十歳で 千三百五十二瓦

などと云ふ例があるから、それによつて見ると、單純なる腦重以外、腦量以外に、別に賢愚の別を生ずるところの要素が無ければならぬ。元來腦なるものは種々なる部分より成り立つて居るが、精神作用を司るところは、其の表面の皮質のみに限るから、此の部分が大きく重ければ、よし他

の部分ぶぶんが小さく軽くとも精神作用せいしんさくようは強く働き、又それに反はんして他の部分たのぶぶんが如何いかに大きおほく、また如何いかに目方めかたがあるかと云いつても、此この皮質ひしつの部分ぶぶんが小さければ精神作用せいしんさくようも従したがつて亦鈍またにだいわけである。然しかも此この部分中ぶぶんちゆうにあると二ろの神經細胞しんけいさいぼうの分量ぶんりやうも多く、質量しつりやうも良好りやうかうなるものでなければ、敏捷活潑びんせうくわつぱつなる精神作用せいしんさくようを営いそなむことが出来ぬのである。腦なうの廻轉くわいてんが多く、其その溝こうが深いほど恰れいり憫いりであると云ふのは、要するに廻轉が多ければ腦の皮質面も亦大きくなるからである。だからして詮するところは「黄金は石よりも貴し」と云ふ諺ことわざの如ごとく、また「懐中時計は柱時計よりも精巧なり」と云ふ語ことばの如ごとく、精神作用しんさくようの銳鈍えいどんは、單たんに腦全體なうぜんたいの輕重大小けいちゆうだいせうのみによつて決すべきもので無いと云ふことに歸着きやくちやくするのである。

大脳は精神の宿る處

大脳だうなうは精神せいしんの宿やどるところと云ふことは、今日こんにち生理學せいりがく、解剖學かいぼくがく、病理學びやうりがく、精神病学せいしんびやうがく等の進歩しんぽに連れて明瞭めいりやうとなつたが、昔むかしは精神せいしんの所在しよざいを知るに困難くわんなんしたもので、彼の兼好法師けんかうほふしの如ごときは「思ふこと云はぬは腹膨はらふくるよ業わざなり」と云つて、精神せいしんの住所ぢゆうしょを腹腔ふくかうと考かんがへた。また「胸むねに手を當あてよ考かんがへる」とか「萬事胸ばんじむねにあり」とか云つて、胸腔内きょうかうないに精神せいしんが宿やどると思おもはれた時代じだいもあり、西洋諸國せいやうしよこくの人々ひとびとは「心臟しんざうは精神せいしんの宮殿きやうてんである」と信しんじて居ゐた。また或あるる解剖家かいぼくかの如ごときは、刀たうを執とつて屍體したいの解剖かいぼくをなし、頭あたまの腦天なうてんから足あしの爪つま先さきまで殘のこる限くま無く穿鑿せんさくしたが、どうも精神せいしんらしいものが見當みあたらないので、甚はなはだしく失望しつぱうしたが、動脈どうみやくが臨終りんじゆうの際さいの最後しうごの收縮しゆしゆくで、血液けつえきを殘のこらす靜脈じやうみやくに送おくり出して空虛くうきよになれるのを發見はつけんし、それが精神せいしんの住所ぢゆうしょであつたが、今死いまし

そして同じ運動中樞でも、手の運動中樞と、足の運動中樞とは其の所在部
が異つて居て、脳の或る部分は手の運動を司どり、他の部分は足の運動を
司つて居ることは、丁度同じく農商務省と云つても、畜産課と工務局と
は、其の部屬も、またやる仕事も違つて居ると云つたやうな次第である。
また我々の運動中樞中、右半身の運動中樞は左脳にあり、左半身の運動中
樞は右脳内にあるから、若し頭部に怪我をして、左右何れかの運動中樞を
傷けたとすれば、即ち半身不隨なる「中氣」と云ふものになり、また若し言
語中樞を破壊されるれば、失語症と云ふて、全く談話の出来ぬやうになるも
のである。

それからまた五官器から來る通知は、必ず長く脳に保存さるべきもの

で、人の智識と云ひ、經驗と云ふも、要するに此の通知の集合によつて生
ずるものである。火を見て焼けるもの、熱い物と云ふことを知るのは、會
つて火の物を焼くを見、また一度身體に近づけて熱を感じた時の感覺が、
腦の中に残つて居るからである。併し産れたての嬰兒の腦は白紙の様に何
物も書いてはないが、漸次五官の働きに連れ、少しづつ其の感覺や印象が
書き入れられて、遂には複雑なる智識經驗を藏するやうになるのであるか
ら、此の意味から云へば、大脳は殆んど活きたる圖書館と云つてよいの
で、醫學者、文學者、哲學者等々其の專攻の學問に従つて、専門の智識
を藏すること、殆んど圖書館の藏書と同じで、物事に注意を拂ふ人ほど、
此の經驗智識が多く深くなるのであるが、それに反して茫然として深く注

意を拂はぬ人は、幾何に多く見、多く聞きても、其の貯ふところは僅少であるから、かゝる人はこれを記憶の悪い人と云ふものである。

小脳は、昔は生殖作用に關係のあるやうに思はれ、後頭部の突き出て居る者は、多情のやうに云ひなされて居つたが、追々學問の進むに従つて、全く生殖とは關係なく、唯身體各部の運動を調節して、其の平均を保つに必要な機關であると云ふことが判つて來たのである。従つて大脳のやうに、思想や感情若しくは精神作用を營むところではない、今試みに家鳩の頭蓋を切り開いて、其の腦の全部を除去つて了へば、無論直ぐに死んで了ふが若し其の小脳の一部のみを取ると、單に鳩の飛ぶ力は弱くなり、其の運動の有様も頗る拙劣になる。更に多くの部分を取れば、今度は完全に飛ぶこ

とも、歩くことも出来なくなるが、視力は依然として舊の如く、聴力にも障碍無く、智力も亦完全であるが、唯工合うまく飛ぶところの力は失はれて居る、併し飛ばんとする意志丈けはあるから、追へば飛ぶふとするが、飛ぶことは出来ない、其の運動は見當違ひで思ふ通りに行かないやうになる、何故かうなるかと云ふに、それは全く運動を調節するところの小脳が無い爲めである。一體運動と云ふものは、頗る複雑のもので、一つの運動をするにも、數多の筋肉が歩調を一にして相共に働くべきものであつて、假へば一足踏み出すにも、六種の運動が必要で、これが爲めに十二個以上の筋肉が共同運動をしなければならぬ、即ち片脚を舉げ、之を曲げ、前へ伸し、足先を地に受け、次に踵をつけて全身の重量を委ね、次に他側の脚

を同様にして、始めて一步を踏み出すことが出来るので、此の複雑なる共同運動が一絲亂れず、よく營まれるのは、即ち總て小腦の支配によるので、若し小腦が傷けらるゝか、或は病氣に罹るとかすると、此の調節が亂れるので、運動はうまく營まれずに、所謂運動失調症と云ふ病氣になるのである。

延髓は我々の一身に於て生命上最も大切なところである。大脳や小腦は多少之を傷けても生命に異常は無い、勿論それらの障害はあるに相違は無いが、生命だけは大丈夫だ、併し延髓に至つては一寸之を傷けても必ず即死を免れないから、生命の上にはこれほど大事なところはない。然らば何故延髓はそれほど重要であるかと云ふに、此處には我々の生活上必ず無

くてはならぬところの種々の作用の中樞があるからである。就中肺臟が悪い空氣を呼び出して、新しい良い空氣を吸ひ入れると云ふのも、心臟が日夜を分たず、血液を全身に分布すると云ふのも、皆延髓の中樞から命令を受けてすることであつて、此の作用が無くなれば、生命の根は全く枯れ果てなければならぬので、昔から云ひ傳への「頂門の一針」なる語は、よく此處の道理を云ひ表はして居る。

それから延髓には、今一つ極大切な作用がある、それは反射作用と云ふもので、此の作用は、大脳から命令が無くとも、身體保護の爲めに、全身各所に於て無意識に營まれるのである、例へば火に近ければ思はず身を遠ざけて火傷の危険を避け、物が眼の前をかすめて通れば、自ら眼瞼を閉ぢて

三
眼球を保護する、昆蟲が鼻腔に飛び込めば、我れ知らず噴嚏が出て、これを噴き出して仕舞ふと云ふのは、皆此の反射作用である。また痰が氣管へつまれば咳嗽が出て之を喀き出してし、悪い食物が胃に入れば吐氣を催して吐き出してし、塵埃や土砂が眼に入れば自然に涙が出て之を流し出し食物が口に入れば唾液が出て消化を助け、次に咽喉の筋肉が引き緊つてこれを嚥み込ませると云ふのも、皆延髄から起る反射作用である。併し延髄はかく大切の作用をするに拘らず、其の量は極少いもので、長さ僅かに一インチ半、幅四分の三インチ、厚さ殆んど半インチに満たぬものであるから所謂「生死の點」とは、よくも其の機能を云ひ現はした言葉と云はねばならぬ。

それから腦には十二對の神經即ち腦神經がある、そして鼻へ行つて香臭を司るのが嗅神經、眼に行つて視ることを司るのが視神經、眼の周圍の筋肉へ行つて眼の運動を司るのが動眼神經と滑車神經と外旋神經、額から齒や顎や頬へかけて其の感覺を司るのが三叉神經、顔の肉の運動を取り締つて居るのが顔面神經、聽覺を司るのが聽神經、舌から咽頭へかけて行つて居るのが舌咽神經、肺とか心臟とか胃腸とか云ふ内臓器に分布して居るのが副神經、主として舌に行つて居るのが舌下神經である。

第二章 頭痛の種類

頭痛は、誰も知る如く、頭の痛い病氣であつて、これは一つの病氣で無

く、云はゞ或る病氣に來る一つの症候である。假へば寒冒より來ることもあれば、其の他總て熱のある病氣には皆頭痛が起る。それから胃腸病から
も、婦人病にも、また神経痛、腦病、微毒、耳鼻咽喉病、眼病、中毒其の
他にも來るものであるが、病理學上にはこれを三種に區別して居る、即ち
實質的變化に伴ふ疾病より來る頭痛、これは腦や何かに變化が出來て、そ
れが爲めに起るもの。第二は中毒によるもの。第三は官能障害より來る頭
痛、かう三つに區別することが出来る。
第一の實質的變化に伴ふ疾病より來る頭痛と云ふものは、主もに左の病
氣より來るものである。

一、腦疾患即ち腦の外傷、腦腫瘍、腦微毒其の他の腦病。

二、腦血管の疾病即ち腦出血、エンボリー、トロンボス、動脈瘤、微毒
性血管炎、血管の變質其の他。

三、腦膜の疾患即ち結核性の炎症、微毒性の炎症其の他の腦膜炎。

四、頭蓋の疾患即ち腫瘍、膿腫、齒の病氣。

五、其の他の疾患即ち眼病、耳病、鼻腔内の疾患。

第二の中毒から來る頭痛は、其の原因を二つに分けることが出来る、即ち
外界から來るところの毒物を吸入攝取するによつて起るものと、體內に
發生し、毒素を吸収するによつて起るものとの二つである。

一、外界より來る毒物即ち惡空氣の呼吸、空氣の流通惡しき家屋内に居
住すること、瓦斯中毒、藥品より發生する含毒蒸氣、瓦斯の吸入、酒、

二、腦血管の疾病即ち腦出血、エンボリー、トロンボス、動脈瘤、微毒
性血管炎、血管の變質其の他。

三、腦膜の疾患即ち結核性の炎症、微毒性の炎症其の他の腦膜炎。

四、頭蓋の疾患即ち腫瘍、膿腫、齒の病氣。

五、其の他の疾患即ち眼病、耳病、鼻腔内の疾患。

第二の中毒から來る頭痛は、其の原因を二つに分けることが出来る、即ち
外界から來るところの毒物を吸入攝取するによつて起るものと、體內に
發生し、毒素を吸収するによつて起るものとの二つである。

一、外界より來る毒物即ち惡空氣の呼吸、空氣の流通惡しき家屋内に居
住すること、瓦斯中毒、藥品より發生する含毒蒸氣、瓦斯の吸入、酒、

煙草、鉛等の中毒。

二、体内に發生する毒素の吸収は、熱病假へばチフスに罹つて頭の痛むなどは其の例であつて、尿毒症、糖尿病、胃腸病等にも起るものである。

第三の官能の障害によつて起るところの頭痛は、主として左の場合に起るものである。

血圧の變化、充血、貧血、精神過勞、頭腦の壓迫、神經衰弱、眩暈、月經障害、ヒステリ、その他。

頭痛の來る場合は、右の如く澤山ある、今此等の鑑別を擧げて、次に其の主要なるものに就て少しく記載しよう。

第三章 頭痛の鑑別と其の療法

第一 中毒性頭痛

頭痛の種類即ち頭痛の起る機會は、前章に述べた如く澤山あるが、さでいよく頭痛が起つた場合には、何の爲めに起つた頭痛であるかを知らねばならぬ。若し寒い晩に戸障子を閉め切つて置き、炭火を盛んにして多數で話をして居るときに頭が痛くなつたならば、それは炭酸中毒の爲めに起つた頭痛であるから、さういふときには、戸障子を開いて新しい空氣を入れるとか、または外に出て少し寒い風にでもあたるか、それで癒つて了

宿酔で頭の痛いもの、鉛分のある白粉を常用して居る人に起る頭痛なれば、それは一種の中毒であるから、其の原因を去る、即ち酒を止めるか、無鉛白粉を用ゐるかせねばならぬ。また鼻が悪いとか、胃腸が悪いとかの爲めの頭痛ならば、其の原因を除かねば決して癒らぬものである。

第二 寒冒惹きの頭痛

若し熱が出て少し悪寒がしたり、さうして頭痛するならば、先づ寒冒を惹いたものと思ひ、アンチピリン（或はアスピリン〇・五）〇・五を頓服して暖かにして居ると、大抵のものは癒る。また「カミツレ」を煎じて飲んで

もよろしく、軽いものならば熱い玉子酒でも飲んで寝るとそれでよろしい。併し頭の心がツキン／＼と痛く、そして熱はだん／＼上つて行くやうであつたならば、それは唯の寒冒で無くて、もう少し重い方の熱病かも知れぬから、さう云ふときには速に醫者にかゝるがよろしい、總て病氣は早く醫者にかゝるほどよろしく、逆も手療治の出来ぬものとあきらめが出来たならば早く匙を投げて醫者にかゝるがよろしい。

第三 脳に異常あるときの頭痛

普通の頭痛は、頭を壓へるとか、または頭を叩く、即ち按摩するとか、揉むとか、鉢巻するとかすると、少しは楽になるものであるが、若しそれ

が壓へたり、叩いたりすると、反つて痛くなるやうであつたならば、それは腦か腦膜に病氣があるものである。また特に夜間に頭痛がひどくなつて来るやうであつたならば腦微毒に疑を置かねばならぬから、必ず微毒を患つたことのある人は云ふ迄も無く、假令患つたことの無い人であつても、速に醫師に診療を請はねばならぬ。此の頭を壓へて益々痛みの強くなる方の頭痛の中には、重い病氣もあるから、かう云ふ場合には、初めから手療治などを試みずに、信用すべき醫師に就て充分なる治療を受くるがよい。

第四 頭痛持ちの頭痛と其療法

以上述べた頭痛は、普通さう澤山あるものではないが、中には少し天氣

工合が悪くなると、すぐ頭に来ると云ふやうな人、即ち頭痛持ちの頭痛と云ふものがあるが、これは最も多いもので、神經衰弱、ヒステリー、婦人病、胃腸病、眼疾に近眼等で度に合はぬ眼鏡を用ゐて居るとき等に起るもので、これを神經性の頭痛と稱し、普通頭が痛いといふのは、大抵は此の種の頭痛である。

神經性の頭痛には、其の性質や、其の痛む度合に種々差異があるが、兎に角頭のどこかに痛みがある、頭の外皮の軟部即ち頭の皮膚や筋肉に痛みのあることもあれば、頭蓋の骨膜または頭蓋骨が痛むこともあり、または腦髓を被ふて居る所の膜、それに續いて腦髓に入り込んで居る所、其の他いろいろの場所が痛むことがあるが、此等の場所に頭痛を起す原因は何で

充血性の頭痛

あるかと云ふに、血液分配の不規則に基くことが多い、即ち頭の一部分に偏して血液が集る充血状態と、或は其の反対に、一部分の血液が缺乏する貧血状態とによつて頭痛が起るもので、殊に頭蓋腔の内容即ち脳髓及び其の被膜の血液が一部分多くなるとか、又は少くなるとか云ふことに基くものである。彼の所謂逆上するとか、頭がズキン／＼するとか、脈を打つとか、身體を動かすとか頭を下けるとかすると強くなる頭痛、頭が破れさうに痛む頭痛、頭の頂邊や額縁の邊が痛むもの、または動脈硬化症（これは老人に多く、また常に酒を嗜む人、微毒の人などにもある）など云ふものは、充血に屬する方の頭痛である。次に全身の貧血に起る頭痛、額や額縁の邊に壓しつけられるやうに痛みを覺え、折々眩暈がしたり、イヤに欠伸

が出たり、胸が悪くなつたり、嘔いたりするのは、貧血性の頭痛に屬するものである。

充血性の頭痛のときには、顔がほつて、少し赤くなり、逆上せるやうな氣味があり、眼瞼を翻轉する、即ち俗に云ふ赤べをして見ると赤くなつて居るから、かう云ふ風の頭痛のときには、枕を高くして寝ね、さうして冷すとよろしい、梅干や即効紙または薄荷などを額縁に塗る人があるが、それも多少効がある。また頭を揉んでもよい。

貧血性の頭痛のときには、顔が少し蒼白くなつて居る、赤べをして見ても赤くない、かう云ふときには枕を低くして、さうして頭を温めるとよろしい、冬ならば毛糸製の帽子を被つて居るなどするとよい。そして頭を叩

貧血性の頭痛

應急手當

根治法

いたり、揉んだりすると、非常に氣持のよいものである。

頭痛持ちの人は何れにしても、通じのあるやうにして置くがよい、それは通じのふだんによくはない人であつたならば、灌腸をしてもよろしいが、カスカラ錠を六つほど朝の空腹時に頓服すれば大抵は快く通ずるものである。それから何性の頭痛でも、安知必林〇・五を頓服すると、痛みは止まるものであるが、これは劇薬であるから、頭痛持ちの人は醫者から之を貰つて置いて用に臨んで頓服するもよからう。

頭痛の應急手當は右に述べたが、一時性のものならばこれで癒るが、併し持病となつて居るものでは、これだけでは根治することが出来ぬから、其の原因に溯つて、胃腸の悪い人は其を治療し、腺増殖症(鼻ヅマリ)あ

る人は切除手術を受け、眼筋調節麻痺ある人は適度の眼鏡をかけ、全身貧血ある人は鐵劑を服用すると云ふやうに、根本的の治療を加へることが必要である、さうすれば決して頭痛持ちの持病となるものではない。一體持病と云ふものは何種の持病にもせよ、多くは野蠻時代の遺風によるもので、癒せば癒るものを「これは持病だ」と云ふて、根本的の治療を加へぬからである、根本的の治療さへ加へれば、大抵の持病は根治するものであるから、よくよく心得置かねばならぬ。

第五 偏頭痛と其療法

主徴

前項に述べるところの頭痛は、多くは頭全體に痛むのであるが、それと

反對に頭半分だけ痛むものがある、殊に左り半分痛むことが多いものであるが、これは偏頭痛と云ふて、普通の頭痛よりは、少し其の趣きを異にして居るもので、これは時々發作的に起ることもあれば、または一週間置きとか、十日置きとか云ふ風に、所謂週期的に起ることがあつて、それはひどい痛みのものであつて、婦人にあつては月經と共に起ることもある。そして痛みの起る前には、何だか目の前が暗くなつたやうな氣がして、それから間も無く痛んで来る、それと同時に嘔いたりすることもあれば、胃腸に故障が起つて食が進まなくなるやうなこともある。痛みは多くは左り半分の頭であるが、時としては兩方の顳額部が痛んで来ることもある。痛みは半日乃至一日續くと、止まつて、それから一週間から二週間位何とも

原因

無くして、また痛みが来ると云ふ風の痛み方である。

偏頭痛は、多くは神経質の人に多いもので、殊に身心を過勞せしめた後に來ることが多い。それから痛風と云ふ病氣とも關係があるらしい、或る學者は其の原因を血管の痙攣による局處の貧血であると説明して居る。

本症は極めて慢性のものであつて、中には生涯癒らないこともあれば、また婦人にあつては月經が止まれば、それから偏頭痛も無くなる人もある。

療法

砒素、ニトログリセリン、ミグレニン等は醫者の賞用するところであるが、これは元より素人には用ゐられぬ。それで素人の心得としては、便秘のある人は、天然カルルス泉鹽一五・〇を水一五〇・〇に溶かして、毎朝

それを服用するとよろしい、慢性便秘が癒ると共に、本症も癒ることがある。それから出来るならば、夏季には山地に轉地するか、海岸に行きて海水浴をやるか、冬は温泉場に行きて湯治するなどは最もよいことである。ひどく痛んで来たときには、矢張醫者の手當を受けなければならぬ。

第四章 男子の頭痛持ち

第一 男子の偏頭の多くは神経衰弱

男子の頭痛持ち、即ち持病となつて天氣が悪かつたり、春先きになつたりすると、何時も決つて頭痛すると云ふやうなのは、其の多くは神経衰弱

である。神経衰弱と云へば、肺病や花柳病同様、殆んど文明國の特産物と云ふても良い位文明諸國に多いものであるが、我が國に於ては、開國以來日清日露の二大戦争を経、僅々四十餘年の間に、兎も角も世界第一等國のお仲間入りしたのであるから、此の間に於て神経の過勞は到底免れぬもので、従つて神経衰弱は非常に多くなつた。勉學時代の學生は申す迄も無く、銀行會社員、爲政家、新聞記者、學校教師等腦力を主として生活して居るものゝ間には、神経衰弱の名を知らぬものが殆んど無いと云ふ位に流行して居る、だから、時代の要求に應じて(？)、胃腸病、脚氣、神経衰弱専門など云ふ何等關連の無き病名を並べ立てて居る開業醫もある位で、今日は正に神経衰弱全盛時代とも云ふべき有様である。

ところで何故腦力を主とするものに神經衰弱が多いかと云ふに勞力を主とするものにあつては、其の仕事の効果を現す状態は頗る簡單なもので、假へば打穀機のやうな粗末な機械の働きと同様であるから、常に不消化物を食ふとか、大酒を飲むとか、いろく不衛生のこともしても、さして健康に影響はないが、主として腦力を使ふ人は、精巧な機械と同様であるから、少しのことでも直ぐ障害を來たす、丁度簡單なる機械は傷れ悪いが、緻密なる機械は傷れ易いと同様であるから、腦力を主として生活して居る人にあつては、餘程其の使用に注意せねば、損害を受けることになる。

第二 神經衰弱の症候

神經衰弱とは、其の名の如く神經の衰弱である、尤も神經衰弱にも健康、つまり生理的のものと、病的のものとある。これを分り易く説明して見ると、我々が遠足したり、山に登つたり、或は力業をしたりすると必ず疲勞する、併し此の場合に於ける疲勞は生理的であるから、いくら長くとも二三日も休めば元の通りになるけれども、神經衰弱に罹つた人、即ち病的のものは、其の疲勞は幾日経つても癒らぬ。それから勉強するに、非常に難しいことに出會して判断しなければならぬ、或は非常に不愉快なことがあつて激昂すると云ふ場合には、腦力が疲れて總ての判断力も減じて來る場合があるが、それは生理的であるから、一定時を経れば恢復するけれども神經衰弱に罹つた人は、かう云ふ場合に出會した時には、何時までも疲れ

肉體的の
徴候

が取れない、恢復する方法を講じても疲れが取れない、此等は神經衰弱の證據である。

神經衰弱に現るゝ症候は、肉體に現はるゝものと、精神的に現るゝものと二つある。肉體的の症候としては、神經性弱視を呈して視力が衰へる、耳が鳴る、味覺に錯誤がある、知覺に異常を呈する、殊に疼痛がある、それから頭痛がする、これには頭の全部痛むものと、偏頭痛と云ふて、頭の半分丈け痛むものとある、頭が重い、肩が凝る。消化不良や胃衰弱を起す、尿の化學的成分に變化を來す、心悸亢進を來したり、心臓部に疼痛を來したりする、時としては呼吸困難を訴へることもある、眩暈がしたり、反射機能亢進したり、生殖機能に障害を起したりする。睡眠は始めの間は眠

作業不能

むくてくゝいくら寝ても寝足りないが、其の間にはどうして眠られなく、寢附きが悪い、床に入つて寢ようとするとしても寢られない、度々時計の鳴るのが聞える、煩悶し始める、萬感交々胸に集つて益々眼が冴えて來ると云ふ有様であつて、どうかして漸く寢りに就いたと思ふと、直ぐ眼が覺めて又寢られない、また眠つて居る間も決して熟眠は出來ないで、深山夢ばかり見て居る、其の辯畫になるとコクリ／＼居眠りばかりして眠むくて／＼仕様がなない、それじや一と寢入しやうかなどと横になると、今度はどうしても眠むられぬ、毎度これには弱わらせられる。

それから殊に困るのは、作業不能と云ふて仕事が出来なくなる、其の始めは唯無暗に疲勞の感が起る、實際疲勞したのでは無いが、唯何となく疲

精神的徵候

れた氣がする、甚しきは何か仕事をすると、歩くとかすると、これ位働いたから疲れる筈だ、こんなに歩いたから疲れるのも無理が無いと、其の實はまだ少しも疲れては居らぬが、自分で疲勞を拵える、丁度年寄りが無暗に隠居がると同じやうなものであるが、さうかうして居るうちに、今度は全く仕事に堪えなくなる、歩けば膀胱が痛くなり、本を見れば眼がかすむ、物を考へれば頭が痛くなる、物を食へば腹が張ると云ふ風で、全く仕事に堪へなくなる、そして頭の工合が少し悪ければ脳病だとか、胸が痛ければ肺病だとか、自分で自分の身體に故障を設けて、それがいかにも重症のやうに考へられるが常である。

精神上に現はるゝ症候は、一と口に云へば精神的作業の不能で、記憶が

減退する、甚しきは親友の名前も忘れ、僅かの數の暗算も出来なくなる、二三日前に會つた人の顔も忘れ、總て日常の簡單なる用事さへも辨じなくなる、例へば葉書を書くとか、電報文を認めるとか云ふことさへ出来なくなる。また物事に倦情を來し易く、僅かの事でもしまひ迄仕遂けることは出来なくなる、少し休息すれば恢復するが、またやり出すと直ぐ倦きて來ると云ふ有様で、一本の手紙さへ満足に書けなくなる。それから精神の集中力が無くなる、例へば書籍を読んで見ても、精神が集中しないから、直ぐ外の事を考へる、新聞を読んでも一段の記事を読む時に、最終の二行位しか記憶に残つて居なくなり、また理解が出来ない位になる。それから意志が薄弱となつて、常人には極めて平凡のことであつても、それが判断が

つかず、今の瞬間に或る一事を決定したと思ふと、其處に一寸他人の話を聞くと、直ぐに決心を翻すと云ふやうな有様であつて、自信力と云ふものは全く無くなつて了ふが、それが進んで来ると、今度は失望と云ふことが現はれて来るが、これは一番危険な症状であつて、彼の厭世観とか何とか理由の分らぬことを云ふて自殺する連中には此の種のものが多い。

神経衰弱の症候の中に、醫學上最も興味のあるは、強迫観念と云ふて、或る一つの考へに囚はれると、どうしても其を心から離すことは出来ぬもので、それにはいろいろある。假へば臨場苦悶と云ふて、或る場所にはどうしても居堪らぬものや、深い處、高いものを恐がるもの、赤面恐怖と云ふて、人と會ふて赤面するもの、戸締りや何かは何度も見なければ気が済

まぬと云ふ失念恐怖、或は疾病恐怖、潔癖等種々の症候を呈するが、茲には名稱恐怖の一例を舉げて見よう、これは俗に云ふ、甚しき「御幣擔ぎ」で吉日、物の名稱、縁起、數字等に對して心を腦ますこと多く、今日は佛滅だから日が悪いとか、天一天上だから大吉だとか云ふて頻りに其等のことを苦にする。また何でも目出度い名のついた物を喜ぶが、若しと云ふ名稱のものでもあると震ひ上つて恐れ、女中の眞當の名がおしまだと云ふて、慌てゝ暇を出したなど云ふ例もあり、暮の賣り出しの福引で茶杓に當り、縁起が悪いと云ふて、再び物を買ふて福引を爲すも、何時も茶杓ばかり三度當つたと云ふので、恐怖煩悶措く能はず、終に之を破壊放棄して、蒼惶家に歸つたなど云ふ例もある。また數字に對しても三とか七とか云ふ數

を喜び、四とか八とかを嫌ひ、電車に乗つて何心無く番號を見ると、それが四百四十四號であつたので、さては近い内に死ぬか知らん等云ふて、非常に落膽したなど云ふ例もある。

第三 神經衰弱の原因

先天性原因
後天性原因

次に此の神經衰弱は如何なる原因で起るものであるかと云ふに、それには生來虛弱なるもの、父母の神經病など云ふ先天性原因、つまり遺傳のものもあるが、後天性のものとしては、種々なる原因から來るもので、ヘツスリンが八百二十八人の神經衰弱病者を原因別にせるものを見ると、家族の機能性神經病

統計的原
因別

精神的過勞
心配、憤怒、激越
手淫
生殖器病
急性病
外傷
酒荒
分娩
胃腸病
インフルエンザ

一四四
一三〇
六〇
四〇
三九
三八
三〇
二六
二四

荒色

身體衰弱、貧血

慢性病

脱脂療法

職業を得ざる爲め

身體過勞

驚愕

色情禁斷

月經閉止

悪しき教育

一三三

一六

一五

一〇

一〇

九

八

八

七

六

五〇

其他

と云ふ内譯になつて居るが、つまり精神の過勞、心配など云ふことは最も
 大多數の原因を爲して居るが、今日は昔日と違つて、生活も非常に複雑と
 なり、それにつけても生存競争が多くなつたから、神經衰弱は年と共に多
 くなつて行くのは無理のないことと云はねばならぬ。尙ほへ氏の擧げたる
 原因の外に、耳鼻病、眼病等も矢張神經衰弱の原因となるので、これは殊
 に學校生徒に多いものであるから、學校教育の衝に當る人は大に注意せね
 ばならぬところのものである。

四

第四 神經衰弱の攝生法

規律を守れ

神經衰弱患者の養生法は、また豫防法ともなるもので、養生法即ち豫防法となるのであるから、少しく詳しく述べて置かう。

神經衰弱の重いのは、元より入院治療を要するが、軽いのであると、つまりぶらぶら病なのであるから、其の養生も亦大に注意を要するものである、即ち第一は規律を守ること、それには寝るにも起きるにも、食事をするにも、遊ぶにも總て規律のあるやうにせねばならぬもので、朝は眼が醒めたならば、速に起き出で冷水摩擦を行ふ、冷水は神經衰弱には非常に効のあるもので、冷水に半身を浴せしむる方法は、醫家の治療法として應用するところであるから、出來得るならば冷水浴を行ふがよろしい、冷水浴にもいろいろの方法があるが、最も良いのは灌水法と云ふて、如露の

飲食物

やうなものから水を浴びるのが一番である、東京の洗湯屋にては、男湯の方に水を浴びるものが装置してあるが、あの装置がよろしい、あれを各自の湯殿に装置して置いて毎朝浴びると妙である。

食物は何でも食べ慣れたものが良いので、日本料理に慣れた人は日本料理がよろしく、西洋料理に慣れた人は西洋料理がよろしいのであるが、成るべく其の量が少くして滋養成分に富み、且つ消化吸収の良いものが適して居る、量が多くして長く満腹して居つたり、消化が長びいたりすると、血液は胃や腸の方に許り停滞になつてよろしくない。更に之を具體的に云ふと、瘦せたる人には軟かい肉類、魚類、牛乳、バター、鶏卵、米飯、馬鈴薯、新しき蔬菜等がよろしく、肥えて居る人には成るべく脂肪分の少い

食物が良い。近時「オートミール」が腦に良いと云ふ學者があるが、これは元より差支は無い。

それから食事の注意、これは一般的に申せば、自ら欲しいと思ふ感じの無いときはお膳に向はぬやうにして、そして食事の時間は成るべく一定して置くとする。それから食物は充分に咀嚼して用ひ、飲料は成るべく節し、腹一杯に食べぬやうになし、芥子、ワサビ、胡椒等總て香辛類は一切用ぬことにして、食事の前後には運動せぬこと、食事中新聞を見たり考へ事をしたりなどせず、唯氣樂相に面白く談話を交換すること、食後は靜に長椅子に倚つて休むこと、總て冷温度に過ぎざるものを用ぬなどは主なる注意である。

飲酒喫煙の害

飲酒と喫煙は養生に害ありとは、昔ながらの格言であるが、此の二つのものは非常に神経衰弱の害になるものであつて、また神経衰弱の多數は、此の二つのものと濫用より起るものであるから、此の二つのものは絶対に禁止しなければならぬ。それから茶、これも神経衰弱には害の及ぶもの故、濃茶は矢張禁物として番茶の煎じたのか、または麥湯をこれに代へると宜しい。若しまた茶の代りに牛乳を飲用する位に嗜好が進んで來れば非常に結構なことである。それからコーヒも亦茶と同様の害があるから、これも禁すべきものである。

運動

神経衰弱の養生として運動を勧める醫者があるが、これは餘程考へ物である、一體運動と云ふものは、單に肉體を勞する計りで無く、神經を勞す

ること甚しいものであるから、神經衰弱の人が運動するには餘程注意せねばならぬものである。尤も本人が好むなら散歩するとか、庭園に出でて草花を愛するとかは固よりやらしても差支が無い。また他動法と云ふて、乗車、乗馬なども、本人の嫌はぬ限りはやらせるのがよろしい。それから按摩、マツサージ、電氣、入浴なども、矢張緩和なる運動として獎勵すべきものである。それから今一つ發聲運動、これは何かしら高い聲を出すことで、唱歌でも、謠曲でも何でもよろしい。

それから職業、これも絶対に禁止しなくとも宜しい、學生ならば少し位は讀書するのも自身が苦痛ならざる限りはやつても差支がない、餘りに無爲になると反つて今日一日を如何にして暮すべきやの問題に焦慮して神經を

痛むるものである。次には慰安、これにはいろいろの種類があるが、成るべくは自然より受くる慰安の方がよろしく、圍碁、釣魚等總て耽り易る娛樂は避ける方が安全である。

總て烈しい感動は心を病まし身を殺ぐもので、烈しい感情が長く續いて居るのは宜しくない、神經衰弱には此の七情の變動の爲めに起るものが多くあるから、一旦此の病に罹つたならば、何でも心を平和に保つのが何よりの養生法である。それから煩悶せず、氣を痛めぬやうにするなども一つの養生法であつて、古人の云へる。

目が覺めて宿を立出でながむれば

何處も同じ春夏秋冬

樂まん昨日は過ぎつ明日しらす

今日一日を心しづかに

と云ふ様に心を持つのが肝腎である。それから餘り氣を小さくし、または彼れはどうだの、これはかうしなければならぬなどの虚榮心は綺麗さつぱりと打捨てなければならぬ。或る心學者の讀める、

心とは如何なるものと思ひしに

手にも取れず天地一杯

なる歌の如く、氣宇を洪大にし、心を廣くすれば神經衰弱などは頓みに瘥るものである。また虚榮心を戒むる歌に、

慾ふかき人の心とふる雪は、

つもりく〜て道を忘るよ

身の程を知らで貪る名聞と

利慾に命縮めこそすれ

などは、須らく神經衰弱病者の座右の銘となすべきものである。

神經衰弱の養生中最も大切なのは熟眠であるが、さて神經衰弱になると大抵は眠られない、多くは不熟眠で夢ばかり見て居る、それで益々頭腦がほんやりするのが常であるから、眠る前には飲食物を攝らずに、胃は成るべく空虚なるがよろしく、床に就くには少くも晩食後二時間以上を経過しなければならぬ。寢室は靜かにして暗く、そして成るべく空氣の流通が良く、出來得るならば日中使用しない所がよろしい、寢具は必ず心持良い

様に設備する、併し餘り温か過ぎざるやうにする等の注意を拂へば大抵は安眠が出来る。けれどもそれでもどうしても眠られぬやうな人であつたらば、特殊の睡眠法を要することもある、其の方法の第一は温浴であつて、少し微温目の湯に十分乃至二十分位、成るべくゆつくり充分に温まる、洗はずに唯温まる、そして湯から上つたら乾いた手拭を以て十分に摩擦して直ぐに寢床に入ると、忽ち安眠を催すものである。それからまた床に入つて居つて、按摩を取つて貰うもよろしく、腹式呼吸を行ふなども一つの安眠方法である。催眠薬は成るべく用ゐぬ方がよろしく、萬已むを得ざるときは、醫師に就て處方を受くるがよろしい。

第五 神經衰弱の治療法

神經衰弱を治療するには、先づ其の原因となるものを避けねばならぬ。それから一般的療法としては安静療法、それは養生法のところに述べたる精神の安静、それから運動療法、これは主として按摩、マツサージ等の他動法を用ふ。次には轉地療法、これは高地または温泉場に轉地するのがよい。浴治療法、これは温泉に浴するか、または冷水浴を行ふことである。我が國は火山系に屬するを以て、温泉場の數頗る多きも、神經衰弱治療の目的に適ふ主なる温泉場は、相模の箱根温泉、伊豆山温泉、伊勢の菰の温泉、七栗温泉。三河の榊野温泉、笹戸温泉、牛地温泉。常陸の袋田温泉。

信濃の浅間温泉、諏訪温泉、泷湯温泉、元湯温泉。上州磯部温泉、鹿澤温泉。下野の那須温泉。磐城の遠刈田温泉。羽後の泥湯温泉、大湯温泉、湯の澤温泉。美濃の笙の音温泉等其の他澤山ある。

それから重症にあつては、入院治療を主とすべく、營養療法即ち成るべく滋養物を多く攝らしむる方法、電気療法と云ふて電氣をかけるのや、温湯の中に電流を通じて其の中に患者を浴せしむる電氣浴もある。

薬剤中、従来主として神経衰弱に用ゐられたのは臭素剤であるが、それは神経を麻酔せしむるものであるから、餘り感心しない、神経衰弱を治するには、矢張り神経の強壯薬でなければならぬ。

神経を強壯ならしむる薬物は澤山あるが、最近賞用せらるゝものは、鐵

フイチン、フイチン、粒狀フイチン、人參、オルガノリン、イキシダマ、ムクレイン酸(注射用)、ムクレイン酸ナトリウム等がある。また滋養剤にはムクレインがよろしい。

其の他最近の療法として推奨せらるゝは、無線電氣療法であつて、頑固の神経衰弱に無線電氣をかけて治癒した例が澤山あるから、若し慢性にして、諸療効無きものは、本療法を試むるがよろしい。

第五章 女子の頭痛持ち

第一 婦人の頭痛はヒステリーが多い

婦人と頭痛

婦人に多
き病氣

婦人はよく頭痛を煩ふもので、一寸電車に乗つて見ても、乗客婦人の其の幾割かまたは暫時市中を通行しても、店頭に商業を営みつゝある婦人の大半は、其の兩方の額頭に即効紙または梅子の皮を貼り付け、心中恰も萬斛の憂を藏するが如き不快の顔貌をなしつゝあるを見るであらう。即ち斯くの如き婦人は疑も無く頭痛に悩まされあるを證明するもので、婦人に頭痛の多きことは、多言を費して申し述べるまでも無い。

若し婦人に最も多き疾病は何であるかと、問を發する人があらば、猶豫無く頭痛と答へざるを得ない、そこで今度は單に頭痛では判らない、何の爲めに頭痛を發するかと、再質問に接するならば、第一にはヒステリー、第二には脳神経衰弱であるとの答へも、また猶豫なく爲し得ると思ふ。

神經衰弱
とヒステ
リー

女に多い

脳神経衰弱とヒステリーとは元より別物であるが、其の現るゝ徴候は大概同じもので殆んど區別が附かぬ、人によつては男子に來るものは脳神経衰弱症、女子に來るものはヒステリー症であると云ふ人もあるが、元より専門家にはちやんとした區別がある、併し素人にはヒステリーと云へば脳神経衰弱症の重いものと同じであると見て差支が無い。此の病氣は男女兩性の何れに多いかと云へば、無論女子に多い、と云ふのは、一體婦人の神經は抵抗力が男よりは遙かに弱い、これは先天的即ち天賦であつて、男子は外へ出て、社會の競争場裡に立つて奮闘をしなければならぬからして、神經の抵抗力は自然に強く出來て居る、それに反して女子は即ち家庭内の職務に従事するのであるかう、天賦に神經の抵抗力が弱い、である

から脳神経衰弱症と、ヒステリー症とは女には直ぐ来るものである。よく女は神経過敏だと云ふことを聞くが、これは即ち女が神経性病氣に罹り易いことを云ふのである、それに男子と異なり、特別の關係あるは彼の子宮病で、それは無論男子には無い、女子に特有の病氣で、此の子宮病はまた此等の病氣とは深い關係がある。昔は頭痛——ヒステリーは子宮が悪い爲めであると思ふた時代もあつた。これはヒステリーなる病名は子宮なる文字より出来て居るのを見ても判る。

今より一千年以前には、女の體內には子宮と云ふ活き物が居つて、それが悦ぶと妊娠するが、若しも何か氣に障ることがある、即ち子宮が怒ると云ふと、ヒステリーと云ふ病氣になると考へた、誠に馬鹿々々しい次第である。

ある。併し今でも此のヒステリーなる病名を用ひて居るが、其の歴々の研究の歩を進めて見ると、ヒステリーは必ずしも子宮から來るとは限らぬ、子宮から來ることもあるが、多くは脳神経を過度に使ふから起るものであると云ふことが判つた。ところで今日でも其の當時の習慣が残つて居て、俗人は元より醫者迄も妄信して、ヒステリーに罹ると、子宮が健全であつても、子宮の醫者に行き、醫者も其の療治をすると云ふ弊害がある、併し何れかと云ふと、子宮病から起るものよりは、心配から起るものが多い。

第二 ヒステリーの症候

ヒステリーに罹ると、どんな症候を呈するかと云ふに、これには身體的

症候と、精神的症候との二つあるが、先づ身体的症候から云ふと、第一に
は頭重、頭痛、即ち何となく頭が重く、或は上より壓迫される如く、或は
桶輪を箝めたやうに感じ、多くは頭の後部に來り、或は前頭または全部に
渉る。それから痛みの方は、多くは鈍痛であるが、時としては刺すが如き
劇しき痛みを感じることもある、そして其の場所は、前頭或は後頭等一局
所に限局することもあれば、または全部に渉ることもあり、時としてはま
た頭内を攪拌はさらるやうな感じがすることもある。次には、
眩暈 は数日間持続的に起ることもあれば、また發作的に時々起ること
もある。そして仰視するとき、手を高く舉るとき、或は運動後、或は坐位
に於ても現はることがある。また、

睡眠 は多くは妨げられ、全く眠られぬこともあり、甚だ不充分に眠り
得ることもあり、或は唯少時間よりしか眠られぬこともあれば、或はまた
終夜夢ばかり見、或は悪夢に襲はれ、覺めて疲勞を感じることもある。そ
して斯様の場合には種々の空想が浮んで、益々睡眠に遠かり、煩悶して夜
を徹し、反つて曉に及んで僅に眠り得ることがあり、爲めに翌日は身體
が大に疲勞することになる、尤も中には自分が不眠を感じ、徹宵眠らずと
訴ふるにも拘はらず、傍人が見れば毎夜五六時間は安眠して鼾聲を放ちて
熟睡することもあるから注意を要する。次には
倦怠 即ち身體が何となく疲勞の感じがあつて職務を取るにも倦くなる
また、

食慾不振 を來し、病者は食慾缺乏し、胃の空虚なるにも係らず、反つて膨滿を覺え、胃部壓重、鈍痛を感じ、時としては嘔氣、嘔吐、雷鳴、惡心、嘔吐を來たすこともある。爲めに山海の珍味も味無く、食する分量も甚だ少い、茲に於て精神は一層不快となる。また

眼 は常に鋭く周圍のものに注意し、他人の一舉一動を寸毫も見逃さずと、注目を怠らない、時としては持續的に眼を使ふか、微細なるものを見るか、或は光明の不充分なる所に物を注視するかするときは、暫時にして涙出で、羞明を感じ、眼内、眉間何となく重く、痛く、後に視力朦朧として注視に堪えぬこともある。その他

顔面 は蒼白羸瘦し、笑ふこと少く、首を前に垂れる傾向あり、不活潑にして耽しき態を爲す、身體羸瘦して倦怠、脱力的の態度を爲し、多くは、尤もこれに反して肥滿して居る人もあるが、此等の人の肥滿は、一種浮腫の緊張の色澤を帯びることが多い。

其の他耳鳴、神経痛、皮膚感覺異常、運動機障害、血管運動神經障害、或は反射機障害、分泌障害等種々雑多の症候を呈するが、これよりも重要なものは、精神的症候であつて、これは殆んど必發的に現はれる、尤も身體的症候の中にも必ず精神的症候を加味し、精神的症候も亦身體的症候を伴ふものであるから、茲に身體的症候、精神的症候と分けるも、全く分離して述ぶることは六づかしい。此等の現象は、相互に其の原因ともなれば、また結果ともなつて、一種錯綜した特異の症候を現出するものである。

感情の變化

此の症の重なるものは感情の變化で、沈鬱に陥り、不愉快の感あり、餘計なことを氣にする、泣き易い、哀み易い、つまり總ての刺戟に對して反應が過敏となる、であるから、健康時には、何等の感觸を動かさないものでも、甚だ不快なる數時間の變調を來すを見る、即ち精神的知覺過敏になる。病者は甚だ不機嫌で、傍人の動作が少しく自己の意に満たないか、自己の欲する處が即時に行はれぬ時に忽ち立腹し、甚しきは人力で左右するとの出來ぬこと迄も腹を立つことがあるから、時としては天候の快曇もこれが吐責を避くる能はざることがある。或はまた家人の好意に對してさへ溢面を造り、小言を浴せかける、又他人が自分の云ふことを聞き入れぬか或は其の意見に反對をさるゝか、若しくは輕侮さるゝやうなことがある。

作業不能

感情の變換

ば、非常に憤怒し、或は涕泣することさへある。業務に對しては直ちに飽き易く、讀書を初め、事務を執り、人と對談するも忽ち倦厭を來たし、甚しきは之れに接することさへ厭になり、人を避けて語らず、路人にさへ會するを厭ひ、閉居し、或は傍人の高聲に驚き、路人の疾走に恐怖し、時に門前犬の吠ゆるを聞てさへ驚くことがある。感情の變換も亦著しく、朝には爽快に談話せるも、午後には忽ち沈鬱して黙し、甲に對しては親しく喜びて語を交ふるにも拘らず、乙に對して甚だ不機嫌なることがある、所謂愛憎の感があつて、自分の病に於ける訴を諄聽するものは喜んで之を迎へるも、これに反するものは排斥するに至るものである。それから感覺的快樂に向つても健康時の如くには樂みを感

子を産む
ことが少

することなく、飲料、食物等に對しては嗜好の變化を見ることは少いが、
讀書や、音楽や、演劇、遊戯等に對しては好感著しく減じ、聞いて面白
からず、見て樂まず、また家族、親族、友人等の喜ぶべき出来事や、哀む
べき出来事を見聞するも、これに同情を表することは尠い、始終陰性の思
考が腦中を支配し、連日不機嫌で、子供を吐り飛ばしたり、良人に反抗し
たり、一家の不和もそれから來れば、不經濟もまたそれから起る、遂には
實際の圓滑をも缺くに至り、始終精神の働きは休まぬのである。

精神的の症狀は、まだく他に澤山あつて、殆んど捕捉すべからざると
ころのものであるが、尙ほこれ以上重大なる障害がある。それはヒステリ
性の婦人は子を産むことが少いと云ふことである。昔から律義者の子澤

山と云ふ諺があるが、此の律義者と云ふは、ヒステリー性の反對のもので、
體質體格共に強壯に、着實にて、精神作用は落附いて居る、即ち神經は過
敏でない、才氣煥發と云ふ方の反對の性質で、所謂神經質なげぬものを云
ふことであるが、此等の人には諺の通り確かに子供は多く産れる、總て子
を多く産む人は、氣の大きな、活潑な、無頓着で、正直で、餘りコセく
せぬ性質を有して居る。處がヒステリー性の人は全くこれと反對の性質を
有して居る、従つてまた子供を産むことも甚だ少いものであるから、よく
よく注意せねばならぬ。

第三 どうして起る乎

ヒステリーはどうして起るか云ふと、其の原因となるべきものは澤山あるが、第一に婦人の神経の抵抗力が弱いと云ふことは、重大なる關係を持つて居る、弱いとは云ふものゝ、女子の天職に従事して居りさへすれば、滅多に此の病に罹ることは無いが、多くは虚榮心の爲めに、種々の煩悶をする、それに近來は女子教育が盛んになつて所謂教育を強ゆると云ふ傾きになつて居る、女學生自身もまた虚榮心が強いからして無理に勉強をする、此等は皆神経質に陥るところの最大原因である。女子教育の盛大なるに連れて、神経過敏のものが多くなり、近頃はまた厭世自殺なるものも大分見えて來た、誠に宜しくない傾向である。

婦人にして社會に出で、獨立して生活を営むと云ふことも、また確かに

矣

神経質に陥るの基で、斯様の人に限つて身體が弱い、此等は最も天理に反することである。一體女の腦髓なるものは、先天的に男子と同じ課業に堪え得るとは思はれないから、それを男子と同様に社會に立つて、仕事を仕様と云ふのは、抑根本的の誤りではあるまいか、假りに婦人の體格體質、腦髓共に、男子に少しも劣つた點がないとしても、月經中、妊娠中、産褥中は、神経が過敏になり、精神的なり、肉體的なり、男子と同様のことをすると云ふことは、到底不可能のことである。それに女子に固有の子宮病、此の病氣はまたヒステリーに關係あるは前に述べた通りである、かく婦人は先天的に男子に及ばぬ、及ばぬのを無理にやるから神経質になる、ヒステリーになると云ふわけであるから、獨立して良人を持たぬとか、或は深

年齢の關係

遠の學理を研究するとか云ふ婦人は、大に注意すべきことだらうと思ふ。
次に年齢の關係を云へば、先づ第一には春機發動期、即ち十四五歳から十六七歳の間、此の時代には非常に神経が過敏になつて居るから、よくよく注意せねばならぬ、若しも此の際に過度の勉強を強ひたり、或は苦心するやうなことがあれば神経質に陥り、身體が弱くなり、遂には取り返しの附かぬことになる、つまり婦人の一生中最も大切な時代である。次には終閉期即ち四十五六歳から五十歳迄の間、此の時代もまた注意せねばならぬ、春機發動期は始めて婦人の生涯に入る時、終閉期は生理上婦人の生涯を終へて、更に新たなる生活に入る時、共に過渡期であつて、肉體精神共に大なる變動を來すので、神経も甚だ過敏になつて居るから、此の際には苦

其の他の關係

心、心配等總て腦髓を過度に勞することは一切避けねばならぬ。
其の他の關係に就ては、先づ第一に生理的月經時を擧げねばならぬ。此の時もまた神経が過敏になつて居るから、此の際に若しも精神を刺戟するやうなことがあれば、能くヒステリーにかよる、心配、災難、不快な話を聞く、爭論する、または嫉妬等の爲めに、ヒステリーに罹る人は頗る多いものである。それから妊娠中はまた殊に神経過敏の度が劇しいから、最も腦を安靜に保たないと、矢張りヒステリーに陥る虞れがある。小學に目に淫色を見ず、耳に悪聲を聞かずとあるは、昔の妊娠中の戒めであるが、これは最も適切なる衛生法であるから、誰人も堅く守られたきものである。妊娠中の精神刺戟はヒステリーに罹り易く、一步劇しくなれば精神病に罹る

のである、子供が出来て先づ安心と云ふて居るに、産婦の氣が變になつたなどはよくある例であるから、妊娠、産褥中は勿論、家人もよく此の點に注意せねばならぬ。

何處の家を見ても、おさんどんは、其の體格が誠に圓滿に熟して、然も壯健に、所謂婦人の模範的體格を有して居る、然らばおさんどんは平素滋養物でも深山食べて居つて、其の爲めに體格がよくなつたのかと云ふに、決してさうではない、否どうかすると、御飯に香の物はかり食べさせられないとも限らぬ、それにも拘らず實に體格は立派である、さうして神經過敏などは薬にしたくもない、我輩は世間のおさんどんを見る毎に、日本婦人は皆かくあればよからうと思ふて居る。

ところがこれに反して、令嬢とか奥様とか云はるゝ人の境遇を見ると、旨い物は食ひ放策、あらゆる滋養物を攝る、冬になれば避寒に行き、夏は避暑にも出かける、日々湯に入り、温かに着物を着、いろく娛樂の道樂も備つて居る、少し身體の工合が悪ければ醫者が日參する、傍らに二三人の看護婦が附ききりになつて居る。かく大事にされ、衣食住に不自由なくして居るから、皆んな立派な體格を持つて居るかと云ふに、事實はこれと反對で、どうも瘦せた人が多い、之れは抑どう云ふわけであるかと云ふにおさんどんは、所謂滋養性の食物こそ攝らぬが、身體の營養になる丈けの食物を攝つて、それを消化さする丈けの働きがある、精神を使ふことは誠に少く、且つ適宜の運動をする、餘り樂みの無い代りに、また餘り苦痛を

感ずることも妙な、即ち肉體を勞して精神は平和である。肉體の勞働、精神の平和には我々を強壯健全ならしむる處の最大要件であるから、おさんどんの強壯圓滿なる體格を有するは、少しも怪しむべきことはない。之れに反して一方の奥様、令嬢は、相應の教育も受けて居り、地位はどうの、何がどうの、アーぢやならん、コーぢやならんと、虛榮心が手傳つて始終精神を八方に配る、衣食住に不足ないと云ひながら、身體を勞すること少い代り、精神を働かせることは多い、肉體の安逸、精神の過勞は健康を損ずるの要件であるから、此等の婦人に瘦せた不健全の人が多いわけである、そしてヒステリーなども、無論此等の人に多くして、おさんどん等には妙なを理の當然と云はねばならぬ。

第四 どうすれば豫防される乎

それから今度は、ヒステリー症は、どうすれば豫防されるかと云ふに、第一には少女時代から注意せねばならぬ。少女に教育を強めると云ふとは非常に悪いことで、殊に人並より出来る子供には一層の注意を要する、お嬢さんは大層何かとお出来ですななど云はれると、自惚が手傳つて、益々教育を強ゆるが、甚だ間違つたことで、將來其の子を神經質に陥らしむる最大原因であるから、出来の良い子供は、良い子供程注意して、餘り教育をせぬがよい、何れの子供にしても、學術的自活の出来る程教育をするのは、身體上より見てはよろしくない、教育は適度に施すのが人間本來の目

的に適ふて居る。それから子供は餘り干渉して嚴格過ぎるもよろしくな
い、また餘り可愛がり過ぎるも悪い、一家の内事は成るべく兒女の耳に入
れぬやうに注意し、また兩親の品行をも正しくして模範とならねばなら
ぬ。

月經時には神經の過敏となるは、前にも云ふてあるが、殊に神經時には
最も劇しいものであるから、此の際には喜怒哀樂總て度を過させぬやうに
注意し、男女に關した小説などは見せてはいけない。酒、煙草の禁すべき
は勿論、相當の年齢に達しなば、早く良配遇を得て結婚せしむべきが父母
の務であると同時に、また神經質豫防の一つである。

それから慰安と云ふことも大なる必要がある。慰安と云ふと、見物、聽

き物と思ふ人もあらうが、併し芝居や義太夫では眞の慰安は得られぬ、眞
の慰安は家族團樂して樂むに限る、そして時々郊外に散歩して、春は花、
秋は紅葉等自然に接して之を樂むと云ふ習慣を力めて養ふがよい、決して
一二度遠方に行きて豪奢を衒ふの必要はないから、近いところに度々出か
けるがよい。平素勇氣を満たすやう心がけ、何か或る一點を信仰して、自
分に天命のあるを信じて、相當の分に安んじ、虛榮心かられて人を羨み、
煩悶するなどは絶対に避けねばならぬ、若し一度病氣に罹つたならば、藥
用の必要なるは勿論なるも、自分でも其の病氣の起つた原因を考へて、其
の原因から遠ざかるやうに注意するがよい。

子供を餘り甘く育て、また嚴格過ぎるも宜しくないと同じく、妻君に對

する良人も亦餘り我儘を通させるもよろしくないと同時にまた餘り嚴格なるも不可である、殊に多少神経質の傾きある妻君には尙ほ更のことである。總て心配は生活難或は借金等よりも、家庭の不和、嫉妬、人と争ふ、或は不平、怨恨の方は病氣に罹り易いから、よく此の點に注意して、此等の原因より遠ざかるは、豫防策の上策なるものである。

第五 治療法

凡そ種々の疾病を治療するに當つて、最も必要なるは原因療法即ち原因を除くことであるが、本症に於てもまた原因療法が第一の療法となつて居る。原因を除くは、病の未發のときに於ては即ち豫防法となり、病既に發

せるときには療法となるのであるから、力めて其の原因を去るがよろしく、精神的苦悶ならば、これを他の慰安的方面に導き、また身體的疾患あらば、速に之を療する等は即ち原因療法であるが、此處に一つ注意しなければならぬのは、婦人科的疾患である、勿論婦人病あれば、これを早期に治療しなければならぬが、ヒステリーは毎常婦人生殖器病の爲めに起るものと考へて、直ちに生殖器の局處的處置を取るの早計でもあり、また一面危険でもあるから、これは特に注意せねばならぬ。

治療體操には種々あつて、ヒステリーを初め、神經衰弱其他の神經質患者は殊效あるものである、これに數種あるが、左にシユレーベル氏の治療體操を掲げやう。

ドクトルシユレーベル氏治療體操式目錄

- 一、頭首を廻旋すること 十回
- 二、頭首を左右に轉向すること 六回
- 三、肘を後方に牽退すること 八回
- 四、兩手を後方に結ぶこと 八回
- 五、膝を屈し上體を下すこと 十回
- 六、足を屈伸すること 二十回
- 七、兩臂を前方に伸すこと 十回
- 八、兩臂を左右に伸すこと 十回
- 九、兩臂を上方に直舉すること 四回

- 十、手の8字形運動 二十回
- 十一、指を折り、指を開くこと 十二回
- 十二、胸を廻旋すること 八回
- 十三、脚を廻旋すること 四回
- 十四、臂を前後に投ぐること 二十回
- 十五、脚を前後に投ぐること 十五回
- 十六、脚を左右に投ぐること 八回
- 十七、鋸木運動 十回
- 十八、草薙運動 八回
- 十九、手を摩すること 四十回

二十、膝を前方に扛擧すること

二十一、活歩疾行

四回
百歩

各

右の治療體操は、一日一回、悉く之を行ふものであつて、其の時刻は食前がよろしく、また其の運動は總て緩徐に爲すべく、殊に頭部の運動は最も徐かに行ふべきものである。

散歩は、本病者に對しては、最も簡單なる一種の治療的作法である、從つて其の適量もまた醫家の處力に待つべきものであつて、多からず少なからず、所謂適量に之を施さねばならぬ、然らば適量とは如何と云ふに、元より其の人の體質または症の輕重により差異あるも「行ふものこれに由つて陶適の感を生じ、然も更に過勞の氣味無きの程度」を以て適量とせん、

かくすれば決して誤りは無い。

散歩の第一の效能は動作にあり、筋肉動作の産物として刺戟が起る、刺戟が起れば即ち新陳代謝機が活潑になる、其の結果自然體力の旺盛を來すに至るものである。

散歩の第二の效能は、新鮮なる空氣の活力にあり、外界に於ける空氣は、室内に於ける空氣よりは新鮮にして多量の酸素を含む、この酸素はまた刺戟となつて吾人の神經を復活し、沈鬱せる吾人の精神を振興するの怪力を有するものであるから、散歩は力めて新鮮の空氣中に於てするほど其の效果は大なるものである。

散歩の第三の效能は、吾人の心理上に作用するところのものなり、朝來

繁雜なる業務に忙殺され或は鬱結せる憂苦に閉ざるゝものも、一と戸闕を踏んで外に至れば、秀麗日に新たなる大自然の偉容は喜んで彼を迎へ、温容以て彼を款待し、云はずして百萬言に優る慰安を與へ、動かすして以て萬姿の款待を盡す、茲に於て彼はエデンの園に遊ぶが如く、佛家の所謂極樂に至るの感を生じ、忽ち心機一轉して、百の煩悶憂苦自ら忘れ、自然神にも肉體にも活力の充ち満つるを感ずるに至るもので、これが效能の最も大なるものである。

散歩は斯くの如き治療力を有するもの故、患者はよく之を理解し、了知して後ち之を行ふがよろしい、唯歩行を以て散歩の目的となし、同一區間を日々同一歩調で往復するが如き單調に陥ることなく、出來得べくんば、

毎日其の赴くところを變へ、力めて其の効果を大ならしむるやうせねばならぬ。

水治法

水治法には全身浴、半身浴、坐浴、局部洗滌等種々ある故、適宜これを行ふがよろしく、また其の効果は大體左記の如きものである。

- 一、水治療法は、特に全身の新陳代謝を力め、以て營養をして最も適度ならしむ。
- 二、強勢なる刺戟を中樞神経系統に與へ、以て其の衰憊せる官能を喚起するものである。
- 三、其の他尙は種々良好なる作用を、應用せらるゝ各局部に及ぼすものである。

それからヒステリー患者は、兎角自己の病氣を重く考へて居るもの故、此の場合にはナアに軽いからなど一言の下に貶なしてはいかぬ、さも心配らしく聞いてやるとよろしく「ナアに軽いから心配には及ばぬ」など云ふのは、少しも慰安にならぬばかりでなく、最も拙なるものであるから、「なるほどなか／＼重いやうですが、私も一生懸命に看護して（或は療治する）上げるから、何事も私を信頼しなさい、必ず癒してお目にかけます」と云ふ風にするがよい。それから此の病氣は如何なる名醫であつても、患者の信用がなければ何にもならぬから、醫師を頼むには、術の上手下手と云ふよりも、患者の信用する醫師を頼むと云ふことは何より大事である、患者が醫師に對する信用が深ければ深いほど、早く癒るものであるから、

唯醫師の上手と云ふところにはふり目をつけて患者の思惑は少しも顧みないのは宜しくない。

醫藥として用のべきは、顯草劑、カストリウム、阿魏、阿片劑其他澤山ある其他精神的療法、催眠術、教諭、按摩、電氣等の應用も效がある（編者曰く本叢書中のヒステリーの話にはこれが詳して記載してある）

內科
診療
醫學士 森 繁 吉

京橋區築地一ノ五

不許複製

大正八年五月廿八日印刷
大正八年六月二日發行

定價金二十錢

編纂者 東京市小石川區宮下町十二番地 伊藤 尚賢

發行者 東京市芝區二葉町九番地 野村 鈴助

印刷者 東京市本所區番場町四番地 守岡 功

印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社

發行所 東京市芝區二葉町九番地 新橋堂出版部

振替東京二〇〇、電新一九一九

發賣元 東京市京橋區出雲町一番地 新橋堂書籍雜誌小賣部

振替東京四三六四二、電銀五九一

醫學博士 廣川和一郎先生述	◎淋病の話	定價金貳拾錢
佐藤昌祐先生述	◎梅毒の話	定價金貳拾錢
東洋肛門科院長 森直郷先生述	◎肛門病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 杉村 董先生述	◎ヒステリーの話	定價金貳拾錢
醫學博士 南 大曹先生述	◎胃腸病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 森 繁吉先生述	◎病人看護の話	定價金貳拾錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有益な食物と危険な食物の話 附喰合せの話	定價金貳拾錢
醫學士 中村 讓先生述	◎精神病の話	定價金貳拾錢

醫學士 菊池 林作先生述	◎脚氣とリヨーマチスの話	定價金貳拾錢
ドクトル 齋藤精一郎先生述	◎寄生蟲病の話	定價金貳拾錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷上	定價金貳拾錢
醫學博士 豐福 環先生述	◎小兒傳染病の話 卷下	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎感冒と肋膜炎の話	定價金貳拾錢
醫學博士 阿久津三郎先生述	◎男子生殖器病の話	定價金貳拾錢
醫學士 高橋 政秀先生述	◎妊娠と避妊の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 有道先生述	◎良薬と毒薬の話	定價金貳拾錢

醫學博士 杉本 東藏先生述	◎便秘と下痢の話	定價金貳拾錢
醫學博士 中原徳太郎先生述	◎外科療法の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 繁吉先生述	◎注射の話	定價金貳拾錢
醫學士 井上 温先生述	◎眼病の話	定價金貳拾錢
醫學士 森 有道先生述	◎呼吸器病の話	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎性慾教育の話	定價金貳拾錢
ドクトル 落合 惣三先生述	◎科學的美容法の話	定價金貳拾錢
醫學博士 額田 豊先生述	◎腎臓病と糖尿病の話	定價金貳拾錢

四

醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話上	定價金貳拾錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話中	定價金貳拾錢
醫學博士 土田卯三郎先生述	◎腦病の話下	定價金貳拾錢
岡崎醫院長 岡崎桂一郎先生述	◎有効和漢藥療法の話	定價金貳拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎肺病有効療法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎化學的健康増進法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎物理的健康増進法の話	定價金貳拾錢
衛生新報社編纂	◎滋養食物と滋養剤の話	定價金貳拾錢

五

衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂	衛生新報社編纂
◎九種傳染病の話	◎癌の話	◎營養療法の話	◎生殖衛生の話	◎黴菌と消毒の話	◎婦人健康増進法の話	◎兒童健康増進法の話	◎精神的健康増進法の話
定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢

六

衛生新報社編纂	醫學博士 小川 三郎先生述	醫學博士 横手千之助先生述	ドクトル 宮原立太郎先生述		齒科醫學士 五味 芳春先生述	醫學士 菊地 林作先生述	醫學士 菊地 林作先生述
◎理學的療法の話	◎心臟病の話	◎理想的飲食物の話	◎肺炎と其他の肺疾患 附流行性寒胃		◎齒と口腔病	◎胃潰瘍と胃癌	◎消化不良と其療法
定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢		定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢

□續家庭醫學叢書□

七

近刊	◎花柳病の話	定價金貳拾錢
近刊	◎頭痛の話	定價金貳拾錢
近刊	◎生殖器障害	定價金貳拾錢
近刊	◎女子生殖器病	定價金貳拾錢
近刊	◎肝臓病と盲腸炎	定價金貳拾錢
近刊	◎氣管支カタルと喘息	定價金貳拾錢
□體力養成叢書□		
醫學博士 大澤謙三先生述	◎冷水浴と冷水摩擦	定價金參拾錢

醫學博士 二木謙二先生述	◎腹式呼吸	定價金參拾錢
醫學博士 栗本東明先生述	◎海水浴	定價金參拾錢
醫學博士 櫻田十次郎先生述	◎滋養物の攝取 <small>上卷 下卷</small>	各冊金參拾錢
醫學博士 遠山椿吉先生述	◎深呼吸	定價金參拾錢
衛生新報主筆 伊藤尙賢先生述	◎呼吸靜座法	定價金參拾錢
□健康法研究叢書□		
醫學士 森繁吉先生述	◎健腦法	定價金參拾錢
ドクトル 竹中繁次郎先生述	◎強肺法	定價金參拾錢

醫學博士 深瀬 恒太先生述	◎胃腸健康法	定價金參拾錢 郵税金四錢
醫學博士 宮原立太郎先生述	◎食養健康法	定價金參拾錢 郵税金四錢
醫學博士 菊地 林作先生述	◎運動競技に依る健康法	定價金參拾錢 郵税金四錢
□通俗治療養生法叢書□		
醫學博士 千葉 真一先生述	◎耳鼻咽喉病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
醫學博士 額田 豐先生述	◎肺結核治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
醫學博士 岡村 龍彦先生述	◎皮膚病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
醫學博士 阿久津三郎先生述	◎生殖器病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢

醫學博士 豐福 環先生述	◎以上五冊既刊	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
近刊	◎通俗神經衰弱治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
近刊	◎通俗花柳病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
近刊	◎通俗胃腸病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
近刊	◎通俗婦人病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢
近刊	◎通俗腦病治療養生法	定價金參拾五錢 郵税金貳錢

□ 一般衛生書類 □

狩野病院長 狩野謙吾先生著	◎ 增補 神經衰弱豫防法	定價金六拾錢 郵税金六拾錢
狩野病院長 狩野謙吾先生著	◎ 神經衰弱自療法	定價金六拾錢 郵税金六拾錢
村井 弦齋先生著	◎ 著者 實驗痔疾の根治療法	定價金八拾錢 郵税金八拾錢
伊藤 尚賢先生著	◎ 實驗 民 間 療 法	定價金八拾錢 郵税金八拾錢
醫學博士 瀨川 昌耆先生述	◎ 病兒及虛弱兒の養育法	定價金八拾錢 郵税金八拾錢
醫學士 佐藤 得齋先生述	◎ 生殖より育兒迄	定價金五拾錢 郵税金四拾錢
各專門大家述	◎ 實驗 賣 藥 療 法 附滋養劑と滋養食物の話	定價金五拾錢 郵税金四拾錢

終